

News & Scope Handai Hospital

阪大病院ニュース

第6号

発行 / 大阪大学医学部附属病院広報委員会 (総務課)
http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp

禁転載 (この紙面は再生紙を使っています)

住所 / 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-15 TEL / 06-6879-5016

保健医療福祉ネットワーク部

4月から本格稼働

紹介患者さまも円滑に受け入れ

退院支援も地域医療機関と連携



保健医療福祉ネットワーク部オープンのテープカットをする松田院長(左から2人目)と川瀬保健医療福祉ネットワーク部部長(同3人目)ら関係者

阪大病院と地域の病院、診療所を結ぶ保健医療福祉ネットワーク部が、4月から本格的に活動し始めました。ネットワーク部は、大病院としての機能を

最大限に生かし、地域医療にも貢献しながら、患者さま中心の質の高い医療の実現を目指しています。ネットワーク部は、コンサルテーション部門と専門看護外来部門の二つに分かれ、地域の医療機関と連携し、紹介患者さまのスムーズな受け入れや、入院患者さまの退院を支援することが大きな柱になっています。

当面のネットワーク部の大きな仕事は、紹介患者さまの受け入れをスムーズに行うことです。これまで、個々の診療科で受け入れていた紹介患者さまをネットワーク部で一括して受け入れるのです。ネットワーク部の前身である地域医療連絡室が平成5年に発足し、連携している診療所や病院からの紹介患者さまが事前に診察予約をできるように支援してきました。当初は年に約200件の申し込みでしたが、一昨年度には482件にもなりました。でも、まだ紹介患者さまの数パーセントにすぎません。

ネットワーク部が本格的に動き始めましたので、連携医療機関をさらに増やして、すべての紹介患者さまが予約診療でスムーズに診察を受けることができると目指していきます。

その一方で、地域医療機関と阪大病院が一体となって、患者さまに質の高い医療を受けようという目標があります。そうすることで、地域医療機関と阪大病院が一体となって、患者さまに質の高い医療を受けようという目標があります。そうすることで、地域医療機関と阪大病院が一体となって、患者さまに質の高い医療を受けようという目標があります。

より幅広い地域連携や患者さまの支援もしていきます。コンサルテーション部門には、医療ソーシャルワーカー(MSW)をはじめ、看護師や医療事務の専門家がいます。医療ソーシャルワーカーは、入院したときや退院後、地域での生活やケアについて相談を受けることができます。

4月1日から、外来受付1番窓口がネットワーク部の窓口になりましたので、気軽にご利用ください。

原点に立ち心こもる医療を

4月1日より松澤祐次前院長の後任として病院長に就任いたしましたので、ごあいさつ申し上げます。

阪大病院は吹田地区への移転後、今年10年目を迎えるようになっています。大学病院としての使命でもありますが、臨床研究や先進医療の推進、医療人の育成が大事な役割であり、また、病院として大変重要なことは地域医療への貢献であります。これらの点でこれ



松田暉病院長 就任ごあいさつ

まで病院関係者は精いっぱい努力をしてきましたが、今後とも、病院の理念と基本方針にそって、信頼される医療の提供と医学・医療

の新たな発展に力を注ぐ所存であります。さて、社会が構造改革の波にもまれていくなか、医療改革が急速に進んできています。

大学病院もその中で本来の役割を果たしながらも、運営体制の改善が要求されています。独立行政法人化を2004年に控え、包括

医療の導入も迫ってきています。しかし、経営的発想が強く出ますと大学病院としての役割は果たせなくなるのではないかと心配もあります。社会のこのような環境で、本来の大学病院の役割を果たすには、どのような体制や運営改善が必要か。また、さらなる発展には如何なる対策がとられるべきか。これから2年間は大変重要な時期となります。

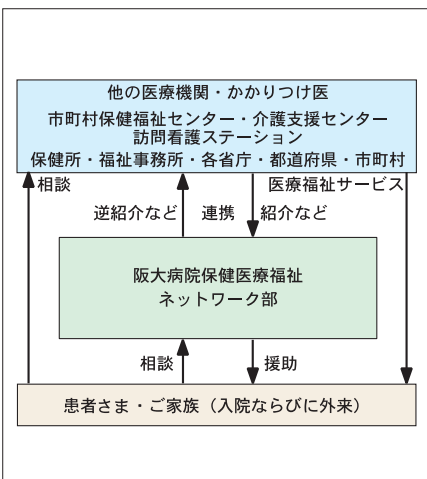
最近、医療事故が盛んに報道され、医療の質が問われています。阪大病院では、これまでリスクマネジメント

地域・先進医療に重点

については、十分な整備を進めてきました。しかし、医療事故をなくし、医療の質を高めるには、システムだけの問題ではなく、医療関係者一人一人がその責任を自覚するとともに、患者さまに心のこもった医療を提供するという原点に立つ診療が、今後一層求められています。

阪大病院は、これまで先進医療について、実績を上げてきました。この実績が認められて、文部科学省から未来医療センターの設置が承認されました。このセンターは、保険診療に至る前の研究的な医療を進めることで、遺伝子治療をはじめ再生医療、細胞・臓器移植等の臨床研究が計画されています。従来、臓器移植や骨髄移植を扱ってきた東4階病棟を拠点とし、さらに産学連携のシステムも構築し、新たな展開を目指します。関西で急速に進みつつある再生医療の拠点の一つとしての役割も果たしていきたいと考えています。

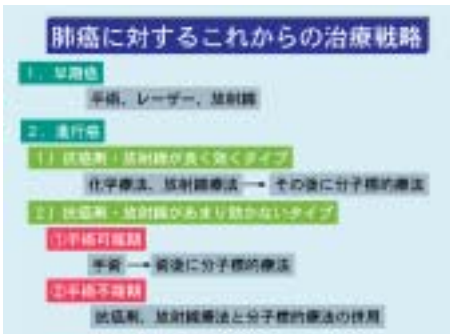
昨年度は、日本医療機能評価機構の認定、高度救命救急センターの承認、院外処方での完全実施なども行い、新たな展開をしてきました。今年度は新たな取り組みとして、地域医療連絡室を発展させて保健医療福祉ネットワーク部が活動を開始しました。病診・病々連携、退院支援を進め、糖尿病やがんの患者さまの退院後のケアのための専門看護外来を設置しました。病院の1階にその窓口を開き、地元医師会との連携も、患者さまの来院



肺がんに最先端医療 分子標的療法やワクチン

呼吸器内科

呼吸器内科は、肺がんや肺炎の患者さまに肉体的、精神的に負担が少なく、効果的な診断、治療を受けていただくことも目指しています。がん死のトップを占める肺がんの最先端医療を紹介しましょう。



この患者さまが抗がん剤や放射線による治療を受けておられます。抗がん剤は副作用が強いので、多くの患者さまが辛い思いを経験されています。抗がん剤はがん細胞だけでなく、正常な細胞の働きも障害してしまつてからです。がんの発生の仕組みが遺伝子レベルで解明されてくるにつれ、がん細胞と正常細胞の営みには数々の違いがあるということが分かってきました。その違つて部分だけを狙つてピンポイントで攻撃するというのが、最近開発されてきた分子標

的療法です。現在、最も期待されているのが、肺がんや乳がんが大きくなる際だけに必要な上皮細胞増殖因子受容体の働きを阻害するという分子標的療法です。米国をはじめ、日本の医療施設でも臨床試験が行われています。もう一つ、肺がんや白血病、乳がんは、WT1という抗原を作る抗がん剤があります。この抗がん剤ががん細胞を攻撃するキラーリンパ球が活発に活動することがわかつてきました。医学部分子病態内科学講座の研究で明らかにされ、この抗原を利用したがんのワクチン療法も開発されました。

肺がんの初期の段階や、手術で切除した後に残っている小さながんを治療するために、



機器を点検するMEサービス部職員

MEサービス部

命を守る縁の下の力持ち

人工呼吸器などを管理

この抗原をワクチンとして使うのです。現在、阪大病院で臨床試験が始められています。分子標的療法の最大の特徴は、ピンポイントで攻撃するため、正常な細胞には影響を及ぼさず、副作用がほとんどないことです。その標的はすべてのがんにあるわけではありませんが、がんの一部を採り、検査することにより、分子標的療法が

効くタイプかどうかあらかじめ分かるようになってきています。（呼吸器内科長、川瀬一郎）

MEサービス部は、病棟や外来へ貸し出しをしている人工呼吸器や輸液ポンプなどのME機器を定期的に保守点検しています。1年ほど前から病棟の巡回サービスを始め、機器の保管状態と使用状況を点検しています。

また、MEサービス部通信、クリニカルエンジニアを定期的に「Eセンター」を定期的に発行。ME機器の基礎知識やよくあるトラブル、病院内で起きたトラブルを紹介して、ME機器への理解を深めてもらっています。

また、MEサービス部は、ME機器の専門家である10人の臨床工学技士をはじめ、計14人の技術者がいます。M

海外視察報告

オーストラリアの3病院

組織的な事故防止策

海外の医療安全管理体制を現地調査するため、阪大病院と岐阜大病院の職員10人が、2002年2月23日から28日まで、オーストラリアへ派遣され、3病院を視察しました。阪大病院の安全対策に生かすべき点が多くあり、オーストラリアの医療制度は、メディケアと呼ばれる国民皆保険制度です。公的病院で受診する場合、医療費は無料が原則です。しかし、国の医療予算を抑

制し、民間の医療参入を進めるため、オーストラリア政府は民間保険の契約を強く推奨しています。民間保険を契約すると、患者さまが自分で専門医を選んだり、緊急でない場合に普通1カ月、長ければ1年かかる手術待ちを避けられます。視察したロイヤルフレッド病院（州立・教

育病院、1138床）では、99年に州政府の強力な援助で、安全で質の高い医療を提供するための中央部門「クリニカル・プラクティス・ユニット」を設立しました。病院全体の医療の質を保つために必要な情報を収集したり、他部門との連携を図っていました。

また、オーストラリアの医療事故防止のリーダーでもある同病院麻酔科のランチマン教授から、院内のインシデントレポートシステムの説明を受けました。オーストラリアでは、医療従事者からひやととした経験が数多く報告されています。

在宅療養器材のお渡し窓口一本化

在宅療養とは、糖尿病患者さまが自宅でインスリン注射したり、慢性腎不全の患者さまが腹膜透析を自宅ですることです。インスリン注射には、注射針や血糖値測定の試験紙などが、腹膜透析には滅菌ガーゼや綿棒などが必要です。このような在宅療養に必要な品を在宅療養器材といえます。

これまでは、療養の種類によって1階の薬剤部カウンターと3階の在宅療養器材交付センターで器材をお渡ししていました。3月1日からの院外処方せん全面発行に伴い、器材のお渡し窓口を1階薬剤部カウンターに一本化することになりました。

4月からは療養の種類にかかわらず、「在宅療養交付指示せん」は1階の薬剤部11番カウンターにお出しく下さい。

病院ボランティア募集

阪大病院で患者さまの手助けなどをしていただく病院ボランティアを募集しています。病院ボランティアの現在の活動内容は、

- ・ 病院玄関での診療手続きの説明、受診科への誘導・介助など
- ・ 入院患者さまの食事時の湯茶サービス、配膳の介助、食事の片付け、洗濯物の片付け、学童の遊び相手など
- ・ 理学療法部作業療法室での介助
- ・ 糖尿病教室の受付
- ・ 医学部学生教育のための模擬患者
- ・ 放射線部での着脱衣介助

などですが、ボランティアが増えれば、快適な病院とするためのさまざまな試みができます。ボランティアに興味のある方は、下記までお問い合わせください。

阪大病院総務課 TEL 06・6879・5021

「看護婦・士」は「看護師」に統一

看護職はこれまで「保健婦・士」「助産婦」「看護婦・士」「准看護婦・士」と称していましたが、今年3月1日に「保健婦助産婦看護婦法」の一部が改正、施行され、「保健師」「助産師」「看護師」「准看護師」となりました。

医療現場において、男女共同参画社会を実現するために、同じ専門職として女性と男性とで違っていた名称を統一したのです。

質問箱

○ 阪大病院でも、薬の院外処方が全面的に実施されていますが、院外薬局での調剤方法や薬剤費など、さまざまな疑問があります。阪大病院に問い合わせ窓口はあるのですか。

A 阪大病院では3月1日から外来患者さまの薬は、全ての診療科で院外処方せんのみでの取り扱いになりました。

薬の調剤方法については、院外薬局でも阪大病院での調剤と、できるだけ同じように事前にお願ひしています。また、院外薬局では、薬を安心して服用していただくために、その服用方法や保管方法、薬の副作用などの説明をしています。

院外処方せんの全面発行に際して、患者さまや院外薬局に対して、調剤方法や料金・保険制度などに関する問い合わせ窓口を、下記のとおり設置しています。

- 調剤方法に関する照会窓口
薬剤部(06-6879-5111 内線:5990)
- 保険制度・料金の照会窓口
医事課(06-6879-5238 担当:川瀬)
- 院外調剤薬局に関する窓口
院外処方せん相談窓口(06-6878-6735)

医師会便り

箕面市医師会会長 田遠 正昭
箕面市医師会は、平成13年度から3年間、「かかりつけ医推進事業」に大阪府の委託事業として取り組んでおり、さらに大阪府の補助事業である、在宅医療協力医・ターミナルケア推進事業を継続して並行実施しています。最近、構造改革の一環として医療界も大きな変革を迫られております。大学病院、国公立病院、私的病院と、かかりつけ医の従来の曖昧・糊とした関係を患者さまを中心とした考え方に改めていき、無駄を省いていこうとする、紹介システムつまり、連携の確立が求められているわけであり、幸い箕面市では、地域中核病院

ととしての位置づけに箕面市立病院が理解を示していただけたので、「かかりつけ医」との役割分担に積極的に関わり組むことができました。つまり、地域医療の充実と「予約診療」「検査予約」のシステム拡充です。しかし、さらに目を向けると、北摂地区には高度機能病院の集中化がみられます。阪大病院もしかりです。阪大病院にも、地域医療連絡室を改組して「保健医療福祉ネットワーク」が開設されている。箕面市を含めた北摂地区全域の各医師会あてに阪大病院の診療予約情報提供していただければ幸いです。阪大病院等の、高度機能病院と、地域中核病院と、かかりつけ医の円滑な連携が将来の理想ではないでしょうか。（1965年、阪大医学部卒）

連携と役割分担

これが医療事故防止に生かされるように、インシデントレポートの内容の秘密を守るための法律が制定されていると聞きました。ウイメラベス病院（州立・教育病院、急性期64床、慢性期136床）は、メルボルンから車で4時間の小さな病院。医療事故防止は、科学的な知見に基づいたきめ細やかな取り組みがなされています。患者さまの転倒を防ぐために床からの高さ15センチの低床ベッドを導入。術後の血圧防止用の院内共通プログラム開発。職員の安全意識を高める職員マニュアルの発行、などです。セントビンセント病院（州立及び民間教育病院、約400床）では、患者さまの病状が急変した場合に、医師が気管内挿管、輸血など一連の処置を適切に行えるように、緊急事態を疑似体験できるシミュレーター「ピンセント君」(約2000万円)を導入。病棟にサテライト調剤室を設け、服薬指導も含め薬剤師が病棟で合理的に働けるようにしています。

医療費抑制政策のもとでの、マンパワー不足は共通の問題でした。IT活用や輸血システムなど阪大病院が優れている点もありましたが、学ばべきところも多く、今後、阪大病院で生かしていきたいと考えています。（クオリティマネジメント部副部長、中島和江）